

DOSHISHA CLOSE UP

同志社・台湾交流の夏 社会調査実習・台湾校友会臨時総会・ 国際シンポジウム

河口充勇（大学大学院文学研究科）

二〇〇二年九月、大学文学部社会科学専攻「社会調査実習」森川眞規雄教授担当クラス（学部生十人ならびに大学院生三人）は台湾で約二週間にわたる現地調査を実施した。その期間、台湾校友会の臨時総会ならびに中央研究院・台湾大学・同志社大学の三者による国際シンポジウムが開催され、また、台湾の政財界、学術界、メディア界、文化・芸術界の方々との交流の機会にも恵まれ、その結果、当初の予想をはるかに超える大きな成果が得られた。

一．社会調査実習

社会調査実習とは、大学文学部社会科学専攻の三、四

年次生を対象とした選択科目（通年）であり、二〇〇一年度に引き続き二〇〇二年度も森川実習クラスでは、台湾校友会のご協力の下、同志社台湾校友の方々を対象とした聞き取り調査を行った。本調査は、約三十人の同志社台湾校友（戦前に同志社で学んだ八十代のお年寄から二十代の現役留学生までを含む）の生活史を具体的題材として、戦前・戦後の台湾社会において日本留学がどのような意味をもってきたのか、また、受け入れ先としての同志社がどのような役割を果たしてきたのかを明らかにしつつ、最終的には、より一般レベルで留学という文化経験のもつ個人ならびに社会に対する効果を考察するものである。その成果は報告書『同志社と台湾留学生』（二〇〇二年三月刊行）ならびに『続・同志社と台湾留学生』（二〇〇三年三月刊行）（注）の中に収められている。



森川眞規雄教授、陳其南教授と実習メンバー（台北西門町で）（撮影：中澤圭）

二．台湾校友会臨時総会

二〇〇二年九月十八日、台湾校友会の臨時総会が台北の老爺



校友会臨時総会で談笑される大谷實総長と林信義行政院
副院長（撮影：逢軍）



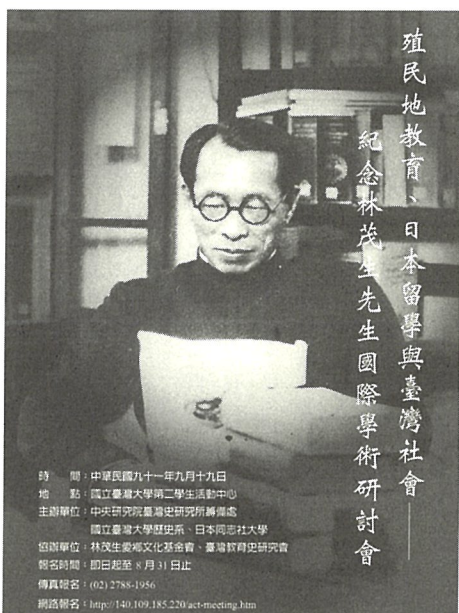
校友会臨時総会で挨拶される陳其南教授（左）（撮影：中澤圭）

飯店（ロイヤルホテル）で開催された。その集いは、現役学生と台湾校友ならびに台湾クローバー会の方々との交流を主たる目的としたものであり、その日は、我々実習メンバーを含め約四十人の同志社人ならびに来賓が一堂に会した。まず、設立時から半世紀以上にわたり台湾校友会の運営に携わってこられた陳誠志氏（台湾校友会名誉会長）のスピーチで会の幕が開き、それから、その日の校友会の集いと翌日のシンポジウムへの参加のために台北までお越しいただいた大谷實同志社総長のスピーチが続いた。その後、先の陳氏とともに台湾校友会の生き字引的存在である鄭兒玉氏（台南神学院名誉教授）が食前の感謝の祈りを捧げられた。さらに会食時には、

来賓である中華民国行政院副院長（副首相）の林信義氏（御令嬢が同志社出身）、同じく行政院政務委員（無任所閣僚）の陳其南教授（二〇〇一年十月から一年間、同志社大学客員教授）、阪口直樹教授（大学言語文化教育研究センター）、森川真規雄教授（大学文学部）、蔡有義氏（台湾校友会会長）、前田實氏（台湾クローバー会会長）からスピーチがあった。そして最後は、参加者全員によるカレッジソングの大合唱で会の幕が閉じた。

三、国際シンポジウム

二〇〇二年九月十九日、『植民地教育、日本留学と台湾社会



植民地教育、日本留学と臺灣社會

紀念林茂生先生國際學術研討會

時 間：中華民國九十一年九月十九日
地 點：國立臺灣大學第二學生活動中心
主辦單位：中央研究院臺灣史研究所籌備處
國立臺灣大學歷史系、日本同志社大學
協辦單位：林茂生臺灣文化基金會、臺灣新史研究所
報名時間：即日起至八月三十一日止
傳真報名：(02) 2788-1956
網路報名：<http://140.109.185.220/act-meeting.htm>

国際シンポジウムのポスター



国際シンポジウム開会の辞（左から陳維昭学長、劉震洛教授、大谷實総長、林宗義教授）（撮影：逢軍）

パイオニアの一人で、帰台後は台湾における近代教育の発展に大きく貢献しながら戦後初期に外来政権下での白色テロにより帰らぬ人となった林茂生氏を記念するものであり、日本・台湾双方での留学研究ならびに植民地教育研究のさらなる発展を願って企画されたものである。シンポジウムに先立ち九月九日には陳教授と森川教授が、林茂生氏の御子息で、林茂生愛郷文化基金会の理事長である林宗義氏（ブリティッシュ・コロンビア大学名誉教授、中華民国總統府顧問）を表敬訪問された。

シンポジウムの開始にあたって、劉震洛中央研究院台湾史研究所主任、陳維昭台湾大学学長、大谷総長、林宗義教授、そして陳其南教授が開会の辞を述べられた。第一セッションでは森川教授が「A Posponed Tradition: Taiwanese Ryuugakusei,

—林茂生記念国際学術シンポジウム—」が台湾大学において開催された。陳教授と森川教授によって発案されたこのシンポジウムは、中央研究院・台湾大学・同志社大学の三者の共催ならびに林茂生愛郷文化基金会と台湾教育史基金会の後援によるものである。このシンポジウムは、戦前に同志社で学んだ台湾留學生の

Doshisha and Cultural Tradition」と題した報告を、陳其南教授が「日據臺灣殖民地現代性的建立」（「日本統治時代台湾における植民地近代性の構築」）と題した報告を行った。第二セッションでは阪口教授が「周再賜と台湾留學生」と題した報告（報告は中国語）を、蔡有義氏が「戦前日本留學與地方精英網路—以同志社臺灣校友為例—」（「日本留學とローカル・エリート・ネットワーク—同志社台湾校友会を事例に—」）と題した報告を行った。第三セッションでは河口が「植民地エリートから台湾ミドルクラスへ—同志社校友会台湾支部の五十年」と題した報告（報告は中国語）を、逢軍氏（大学大学院文学研究科）が「日本留學とマージナル・アイデンティティー—新台湾人のライフヒストリーを通して—」と題した報告（報告は中国語）を行った。最後の第四セッションでは駒込武京都大学助教授が「林茂生和臺南長老教中學」（「林茂生と台南長老教中學」）と題した報告を、張妙娟高雄応用科技大学副教授が「臺灣教會公報」中の林茂生作品之介紹」（「『台湾教會公報』における林茂生作品の紹介」）と題した報告を行った。

今回のシンポジウムでは、呉密察台湾大学教授と呉文星台湾師範大学教授、許雪姬中央研究院台湾史研究所研究員といった台湾史研究の第一人者が司会者や討論者の中に名を連ねており、非常にハイレベルな議論が交わされた。シンポジウムの最後の討論時に、許氏は、植民地下での民族差別や戦後の外来政権下での白色テロといった社会状況を背景にエリートの人々を描こうとする際、感情論からことさらに完璧な人間像を求めた存在を美化したりせず、むしろ客観的な事実に基づいた議論を

行うべきであると強調した。こうした許氏の意見は、今回のシンポジウム全体の意図とも大いに合致したものである。また、この日は、若い学生からお年寄まで、百人を優に超す聴衆が会場につめかけ、発表者とフロアの聴衆との間でも活発な議論が交わされた。二〇〇三年夏には、再び同じテーマでさらに大規模なシンポジウムが台湾で開催される予定である。

四、台湾での交流活動を通して得られたもの

以上の校友会臨時総会やシンポジウムの他にも、台湾の方々の様々な交流の機会があった。森川教授は、限られた時間内での交流活動が効率的になされるよう、そのスケジュール調整



右から游錫堃行政院長、森川眞規雄教授、陳其南教授（9月7日台湾中山記念堂で）（撮影：逢軍）

と活動準備のため、実習メンバーより一足早く九月一日に台湾入りし、九月七日には台北の中山記念堂で游錫堃行政院長（首相）をはじめ各界の著名人と会見した。また、シンポジウムの前日には、地元メディアの取材に応じ、陳其南教授が同志社大学の歴史及び林茂生と同志社の関係について、森川教授がシンポジ

ウムの経緯と趣旨、そして同志社台湾校友会について記者の質問に答えた。九月二十日、『中国時報』は今回のシンポジウムの内容を詳しく報じた。また、シンポジウムの日の夜には、大谷総長をはじめ同志社の関係者九人が林茂生愛郷文化基金会主催のチャリティ・オークションに出席。約五百人の出席者の中には、呂秀蓮副総統や馬英九台北市長をはじめ各界の著名人が数多く見られた。さらにシンポジウムの翌日には、陳教授のご厚意により、陳教授が理事長を務めておられる国家文化芸術基金会の第六回国家文芸賞授賞式に実習メンバー全員が招待された。その式典には陳水扁総統が来賓として出席された。

そうした昨夏の台湾での交流活動を通して、我々は、台湾において同志社の存在を大いにアピールすることができた。これを契機に、今後、ますます同志社と台湾との間の教育・学术交流が広がってゆくことを心より願う次第である。

最後に、昨夏の同志社・台湾交流は、中華民国行政院、中央研究院、台湾大学、林茂生愛郷文化基金会、台湾教育史研究会、国家文芸基金会、そして台湾校友会ならびに台湾クローバー会の方々の協力により可能となったものであり、ここに記して感謝したい。また、お忙しい中を同志社と台湾の橋渡しになって下さった陳其南教授にも重ねて御礼を申しあげたい。

（注）

二〇〇二年度は報告書とともに台湾での活動記録を取めたビデオ・VCDも合わせて製作した。VCD付き報告書に関する問い合わせは森川眞規雄研究室（TEL：075-251-4073）まで。